大地
14号
S60. 4. 13
真宗大谷派
浄国寺(23)5724

老人ホームにて

山崎隆昌

特別養護老人ホーム（一般に寝たきりの老人ホームと呼ばれているが）いなほ園の仕事に携り十一年になる。十年ひと昔と言ふが、この十年は日本の老人をとりまく状況の一つのエポックであった。

それは社会の高度成長のもとに老人の生活が物質的に豊かになり又平均寿命も急速に伸びたこと等それは逆に老人の社会的地位役割を大きく変貌し、さらに身心の障害老人（寝たきりやボケ）が増大した。

僕自身この十余年の事をふり返る時、いろいろの事があったというその量の多さに驚かされると同時に、僕自身、その場その場の状況に、調子よく好い加減に対応してきたこと、その身勝手から壇信徒の方、老人ホームの入所者、職員、親類そして家族等に随分ご迷惑やら気不味い思いをさせてしまったことに苦汁を飲む思いがする。そして今も相変らずそのような状況であること、しかも何一つ解決できていない。

老年医学者フォルケ・ヘンシェンは、二十三年も前にその著書の中で次のように述べている。

『誰にも邪魔されずできるだけ心地よく「夕陽を浴びて」坐り、コーヒーを飲み、テレビを眺めたりして、ただいたずらに自分の死期を待つだけの老人ホームに老人たちを集めようとするのは、例えそれがどんな立派な老人ホームであったとしても、それでいいのだというものではけっしてない。そんなふうにけっしてさせたくないものだ。「受け身」の老人ホームは老人を養護する立場からは過去の時代に属するものだといわれるようになってもらいたいものである』（『老人問題』岩波新書）

ここでいう「受け身」の老人ホームとはどのようなことなのだろう。それは老人の〃生きる願い〃〃生命の尊厳を護る〃ことに「受け身」の老人ホームという事であろう。自からの糞便を食べてしまう老人、「植物」の様に息するだけの老人、夜中大声でわめき徘徊する老人等に接する時、日頃の理想は吹き飛び、『この老人は早く死んだ方が幸福なのではないか』という考えの誘惑に引きづり込まれる自分を見る。一日も早く〃死〃のお迎へをひたすら願う老人の前に立つ時言葉もなく沈黙するのみである。

この十一年間の仕事を通し、ただ一つ大切な事を教えられた。それは、どのような重い障害に侵された老人であっても、例えそれが植物人間のような状態の人であったとしても、その人は必ず『生きることへのメッセージ』を廻りに送り続けている。それがキャッチできるかできないかは、僕自身の中に、どれだけ研ぎ澄まされた共感のアンテナを持っているかいないかである。

これはまさに、僕自身の『生きる』ことの問題であると思う。フォルケ・ヘンシェンの「受け身」への警告は、このことであろう。

歎異抄には「善人なほもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや：：」と説かれているが。

権淵の石仏

北本町二　小　菅　正　吉

私の住んでいる地名は「陀羅尼」といっていた。全国唯一の地名でもあり、経典にも陀羅尼という言葉がある。近くには、滝寺とか、正善寺、菩提ヶ原という地名が多いのは、この地方の仏教の伝来と深い関係があると思われる。

又、現在新町という処は、昔は権淵といって、この地名を仏教的に解釈すると、仮の淵という意味だといわれている。

古い地図を見ると関川の流れは、この権淵より下流は、現在の市役所の辺りまで曲折して日本海に注いでいる。又上流は、この権淵まで数本の流れとなってこの淵に集まる。従って昔から水害の多い処であるらしい。

この新町の公民館の傍に、五輪塔の笠石一個、地蔵様二体、枕石一箇が保存されている。この辺りにも古道があったと聞いているが、この様な石仏に就いて、昔からの言い伝えがあるかどうか、近くに住む知人に聞いてみた。

地蔵様二体については、言い伝えはあったが忘れてしまったとのこと。五輪の塔の石は、笠石ばかりでなく他にもあったのだが何時のまにか散失してしまった。又、枕石は、親鸞聖人が休まれた時の枕石であると言い伝えられている。川の改修工事や農道の開発及び、最近の団地造成の為転々として茲に定まったものである。又、この石仏の辺りに菩提樹の木があったのだが、田んぼの日影になるといって戦前に切られてしまったという。何代目か知らないが、大山家の留守屋敷に今でも有るかも知れない。この菩提樹は親鸞聖人が持っておられたお念珠から玉を一ケ外されて植えられたものと言い伝えられている。

枕石は柿崎の浄善寺所蔵のものは伝説にも有名である。親鸞聖人の中・下越の布教の途中の出来事であろう。さて、権淵の枕石は果して親鸞聖人の用いられたものかどうか気になって致し方ないところである。

聖人の布教の道については、郷土史に詳しい平野団三先生の書に依れば、流罪中は主として、国府の周辺及聖人の奥様である恵信尼の生地、板倉村だと言われている。

恵信尼の五輪塔及三男の信蓮坊の修業したといわれる洞くつのある丈六山に登る機会があった。六月の晴れた日であった。この丈六山から連なる山々は米山薬師まで続き、日本海に至る。又、妙高山は仏の様な姿に見えて、それをとりまく黒姫、飯綱、火灯、焼山は諸仏のように御来迎の縮図を思わせる。そして人々の住む下界の頸城平野を見つめておられるようであった。遠く連なる平野はかすんでよく見えなかったけれど、はるか関川の流れを見た時、やはり親鸞聖人の布教の道は権淵ではないかと思う。権淵辺りで関川の分流が集まるとすれば、直江津の応化橋のように長い橋でなくとも一本橋で渡られるからだ。樹の幹の両面を削り一方の端に孔をあけ縄を通して岸辺の樹等に結び、洪水の時の流失を防いだり、取り外しが簡単で舟運に便利をはかった橋である。

数里の道を歩かれ、権淵の橋を渡られ、流罪の地、五智国府の里もやっと見えたこの地に休まれたに違いない。

その頃の関川はまだ、荘園時代の続きであるから都へ税の代りに運ぶ物資や、信濃路関田峠を通じ

て運ぶ塩等の舟が上下していたらしい。

長い冬と深い雪のため、宿命的というか、この地の人々は生活の程度も低く、人買いの舟も通ったという。その頃の物語として、板倉村の猿供養寺物語、桑取の桑取物語が有名である。又、安寿姫や厨子王丸の人買舟は哀れな物語である。

今、この権淵にある親鸞の枕石、五輪塔、地蔵二体も、何か悲しみに耐えぬ様な物語が秘められているに違いない。

それにしても、私共のこの地に親鸞聖人の足跡の多いことは、ありがたいことと思う。

※小菅正吉さんは、文中にもあるように、北本町二丁目（通称陀羅尼）に住んでおられる。
永年国鉄に勤務され、数年前退職された。身体も心も大柄で温和な方である。
とても勉強家でその豊富な知識にいろいろ教えられることが多い。

俳句五句

山崎　睦

○堂前の
萩鮮やかに
咲き垂るる

○松島の
上にひろがる
いわし雲

○栗一つ
一つ拾ひて
楽しけり

○栗飯を
炊いてもてなす
親鸞忌

○待ち佗びし
春日賜り
心浮く

進化・退化

山崎　真尚（小三）

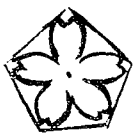
人間はサルからるい人えん、そして人となりました。さらに文化をつくりました。しかしいきちがえて文化を悪用するものが出てきました。

チンパンジーは、すすんではいないけどしかし平和です。チンパンジーの目はいつでもすんだ目です。わるい目はしていません。チンパンジーは、言語などもっていませんがりっぱな生き方をしています。

それにひきかえて人間はあそびくらしています。大とうりょうなんかバカなきょうそうで、つみのない人ころします。

チンパンジーのような目に人間もなってもらいたいです。

人間は退化し、チンパンジーは進化するかもしれません。



私家版・私は猫

山崎慎子

私は猫。昨年五月半ばに三人の姉妹とこの世に生まれた。一ケ月後の六月十二日、縁あってこの家に貰われてきた。前の飼主は、犬を数匹、猫を十五、六匹飼っている無類の動物好きだった。私が永住することになったこの家では、お正月に死んでしまった十九年も居ついた長寿猫の後釜を探していて、たまたま私が貰われることになったのだった。その先代がミーコという名前だったそうで、私はそのままミーコを襲名してしまったのだが、こういう安易な名付け方に実はいささか憤りを感じているのだ。しかし今の所、誰一人として猫語を解してくれないから、時々ミーコ！と呼ばれても私は顔を動かさず耳だけで反応するというささやかな抵抗を試みたりしている。すると子供達は、こいつナマイキだ、なんぞと言いながら私をかまいはじめる。

さて、ここの奥方は二代目ミーコに何を期待していたか。四つの条件なるものは次の如くである。メス。三毛。美人。賢い。そして当初、この家族は口を揃えて、これは全ての条件を満たしているといったものである。

初めての夏、私は不覚にも二度三度と病院の門をくぐった。夏バテという高級な病の為である。でもその頃はまだ子猫の愛らしさが全身に溢れていたから、結構みんなが心配してくれたものだ。但し奥方だけは、あまり猫族がお気に召さぬのか、フン軟弱猫めが！とつぶやいたのを聞いたような気がする。私はどうも、この奥方と下のチビが苦手である。奥方の心の底には猫は人間より低級だという固定観念が頑固にあるようだ。チビの方は何といっても無鉄砲で私を困らせる。一番驚いたのは秋も深まったある日、私をいきなりスーパーのポリ袋に入れてグルグル廻し始めたのだ。本人は実に楽しい気に「遠心力実験だ」と宜うたが、私はこれでわが生涯も終りかと真剣に思ったものだ。

やがて冬が来ると私は妙な気分を味わうようになった。人恋しいと言おうか、猫恋しいと言おうか何かこう不思議な感じだった。まず、おばあちゃんが心配し始めて、雪おろしで騒がしい街の中を、お兄ちゃんに抱かれ、おばあちゃんに付き添われて病院に行き、何やら訳の分らぬうちに私は腹の毛を剃られ手術を施されていた。どうも子宮のない猫になってしまったらしい。そういえば先代は晩年、爪を切られたらしいし、私はこのていたらく、飼われている者の弱みといえばそれ迄だが、人間というのは全く自分の都合次第で何でもやり出すからかなわない。

もうじき私は漸く生後一年を迎える。この頃、当初の四つの条件については、メスで三毛ということだけが期待通りで、美しく賢いというのはあてはまらぬというのが定説であるらしい。なにかまうものか！私は私なりの猫の一生をここの家族と共に送る覚悟なのだから。

（後　記）

一年ぶりの「大地」の発行です。当方の怠慢を申し訳なく思います。今号は陀羅尼の小菅正吉さんから文章をお寄せいただきました。（陀羅尼とは梵語で「善法を保ち悪法をさえぎる」意である）改めて自分の故郷を見なおす思いです。

冬も終り、草木が一斉に芽吹く季節です。この頓城野にも温かな春の陽がさしこみます。（隆　昌）